

滋賀医科大学開学三十周年記念誌

その他の言語のタイトル	Shiga University of Medical Science 30th Anniversary
著者	滋賀医科大学開学三十周年記念誌編集委員会
発行年	2004-10-01
URL	http://hdl.handle.net/10422/4372

第7章

**大学を支えるひとびと
からのエール**

湖医会

良き伝統を育てよう

子は親の背中を見て育つ

渡辺 一良 (二期生) / 滋賀医科大学同窓会 湖医会会長

本学もついに30周年を迎えることになった。この間に卒業生は、医学科24期2,315名、看護学科7期475名を数えた。大変な数の卒業生が県下ばかりでなく国内、国外へと大きく羽ばたいているところであり、長きにわたって大学、学生そして卒業生を支えて下さった地元の皆様をはじめ、関連する諸氏・諸機関にはこの場をお借りして、心からの感謝を申し上げておきたい。

その意味で開学30周年という輝かしい事実、卒業生の一員としてまた同窓会として、感謝の念を抱きながらともにお祝いをしたいと思う。

中国のことわざに、飲水思源というのがある。水を飲むときには、(その水を汲んだ)井戸を掘った人の苦勞に想いを馳せるべきだという意味である。それこそ本学の設立準備室の段階から、大学の基本構想として、どのような大学を目指すか、どのような医師を育成しようとするか、そのためにはどのような教授陣と設備を擁するべきか等々について、相当な時間をかけてじっくり討議したと聞く。これに基づいて、(今から思えば)本当に素晴らしい教授陣と、堂々たる学舎を擁して滋賀医科大学はスタートしたのであった。その基本構想とは『研究指向の医師を養成する、従来の慣習にとらわれない、地域に根ざした、世界に挑戦できる医科大学』をめざす、ということであったと聞く。大学の30歳の誕生日にあたり、また大学法人化の荒波をかぶる大変革のこの時期に、当初の基本構想を思い返し、振り返ってみることが大切であろう。

さてこの基本構想に則って教育を受けた滋賀医大の学生はどのような気質に育ったのか。さまざまな見方があるだろうが、本学の学生気質の良い点のひとつとして、倫理的であること、を挙げることができよう。今日ほど、医療者の人間としての資質が問われている時代はかつてないが、その意味で本学にはとても素晴らしい伝統が築かれてきていると感じている。これは次の二つの要素がもたらした結果ではないかと思う。

そのひとつは、解剖学を単なる解剖実習でなく、生命倫理を体得する場へと高める努力がなされたことである。しゃくなげ会の献身的なご努力と比叡山延暦寺のご協力のもと、県民をあげての献体支援体制を組んでいただいた。これに応えるように、学生はまず、悲しみに暮れるご遺族からのご遺体受け入れ式に学長、両副学長等と共に参列する。そのうえで半年以上をかけて詳細に人体解剖実習をさせていただく。終了すると、1日をかけて比叡山に登り、ご遺族に感謝の言葉を述べて返骨し、一部を分骨して比叡山横川の本学慰霊碑に納骨する。これら一連の過程の中で、若い学生の心には篤志家への尊敬と感謝の気持ち、生命への畏怖の念が生まれる。そしてこの思いは終生消えることなく刻み込まれ、これが後に医療者としての倫理的側面を形成する上で大きな力となって来たと感じるのである。

滋賀医科大学にかける夢

松井善和 / 滋賀医科大学医学部医学科後援会長

もう一つの要素は、初代学長脇坂行一先生をはじめとする、当時の大学人の影響を強く受けて育ったことではないだろうか。脇坂学長は公平無私、謙譲の精神を備えたいわば神様のような存在である。この学長に率いられた我が大学は、全体として静謐・高潔な雰囲気であった。そういう“親”を見て育った学生は、自ずと後輩へも同様に接することとなり、静謐・高潔が本学におけるひとつのカラーとして、受け継がれて来たわけである。

これら二つの要因によって、医療者の備えるべき最も基本的な資質である倫理的観念が学生に涵養されたのだと思う。

明日からの大学のあり方を考えるとき、どのような時代になっても変わらないもの、それは、社会が求める医療人（倫理観に基づいた、確かな技術を身につけた医療人）を育てることである。変わったもの、それは「護送船団」方式の大学運営から、競争と独立経営の荒波へと乗り出したことである。医療・教育・研究の3本柱は変わらないが、それを支えるものが変わったのである。この変化は滋賀医大とそれに関わる者をどのように変えていくのであろうか。

良い伝統をさらに伸ばし、いつまでも滋賀医大が魅力ある存在として存続するよう、純粋に母校を想う気持ちを大切にしたい、と心より祈るものである。

滋賀医科大学が開学以来30年の歴史を刻み、喜ばしい節目を迎えましたこと、先ずは心よりお祝い申し上げます。

この30年は、世代の「世」という漢字の語源でもある「横一棒に縦棒三本、つまり十が三つで三十年」の年数で、一人の人間が誕生して30年経つと次の世代を生み、世代交代することを象徴しています。

滋賀医科大学が、30歳になり、人生で言えば、新たな次の世代を迎え、飛躍する時が来たとも言えます。独立法人化のスタートとも重なり、地域医療の発展に更なる貢献ができる、新たな歴史を築く起点とも言えるのではないのでしょうか。

さて、滋賀医科大学医学部医学科後援会は、昨年春、医学科学生への課外活動や研究生活の充実、国家試験合格の成果向上を目指すことを目的に父母兄弟を中心に組織し、発足しました。

既にございました看護学科後援会とともに、大学全体にわたる後援会組織ができたこととなり、開学30周年に参加できたことを嬉しく思います。

我が子が学んでいる医科大学という切り口から、開学30周年の節目にある滋賀

医科大学の将来にける夢を語りしたいと思います。

全国にある独立法人医科大学の一つとして、滋賀医科大学が今後どのような位置を占めるのかということを考えてとき、国家試験の合格率を100%に近づけることが肝要ですが、すでに97%前後という高い合格率を維持し続けていることを誇りに思いつつ、国家試験の設問では問うことのできない「医療人として高い倫理観と人間性を備えているか」という点においても全国の最高峰に位置付けて欲しいと強く念じています。

人格の陶冶が、全ての教育の究極目標であるとするならば、医学における学問研究の究極目的もそうであると信じています。

滋賀医科大学の卒業生が、医療人としての高い知識・理解・技術と人格的に優れた熱い思いの持ち主として、求め来る人々に向き合ったとき、医療界で最も深い感謝と尊敬の眼差しで見つめられることと思います。

昨春、今春と滋賀医科大学入学式に列席する機会を得て、ひとことお祝いの言葉を述べる時間をいただき、共通することをお話しいたしました。

「卒業後、医療人として患者さんに治療行為をされるとき、患者さんには大変な痛みが伴うことがあります。どれだけの治療行為をしても、その人の痛みは、当人にはありませんから決して分かりませんが、できる限りその痛みを共有する思いで臨む人であってください。」短い時間でしたが、私からの精一杯のメッセージでした。物理的な痛みは同じであっても、その時の患者の心の有りようで激痛にも軽い痛みにも感じられます。相手を思う暖かい言葉掛けや慈しみの眼差しから生まれる信頼感で、医療への感謝の念も大きく変わるものではないでしょうか。

学生の親として、滋賀医科大学には、他の医大とは遙かに高い『強い意志のもとでの人格教育』をして欲しい気持ちでいっぱいです。高い医の倫理に徹した医療人として育てていただき、「滋賀医科大学出身のお医者さんや看護師さんは、暖かい心の人ばかりだ。」100%そう言われたいものです。どうかこの夢を果たしていただきたいと思います。

滋賀医科大学開学30周年 看護学科創設10周年お祝い挨拶

園田和男 / 滋賀医科大学医学部看護学科後援会長

滋賀医科大学開学30周年（看護学科創設10周年）おめでとうございます。

命の源であります水を満面に湛え、400万年にもおよぶ歴史を持つ琵琶湖を眼下に臨む緑豊かな環境のもと、広い教養を礎とし旺盛な研究心と創造性に富んだ医学・看護研究者を育成し地域医療の発展に貢献できる医療人を育てることを目標

にこの湖南の地に滋賀医科大学が誕生しました。

今日まで日々努力を重ねてこられた学長様をはじめ関係者の方々また、本大学に対しご尽力いただきました皆様方により、この記念すべき30周年を迎えられましたことに心から敬意と感謝を申し上げます。

私が、今でも鮮明に思い出します滋賀医科大学への思いは、医学部附属病院が開設され、まだ周辺には建物もまばらであった昭和55年3月、はじめての我が子の出産のため、妻を助手席に乗せ、2人診察のため通院をさせていただいた時のことであります。

出産に不安を抱いておりました二人に附属病院の先生から、詳細な説明をいただき、その対応は心優しく、それでいて心強く感じられるものでした。

また看護師の方の親切な対応に、勇気づけられ安堵し、無事第1子を儲けることができ、出産後の健診時にも笑顔で接していただいた事がつい先日のように思い出されます。

周辺の施設環境は、より充実し整備がすすんでおります。また医学の進歩はめざましく、高度医療化が進むなかでも、命と向き合う医療現場においては、やはり医師と患者の信頼関係が最も重要であり、より求められるようになってきているのではないのでしょうか。

そうした中で歴史を積み重ねられ、高度な技術や知識と同時に豊かな人間性を創造する医療人をそだてられる当大学への期待は、今後ますます高まるものと思います。

生命の源、その母なる琵琶湖がそのシンボルであるこの滋賀から世界に自然環境の保全が発信されているように、滋賀で生まれ育った滋賀医科大学が、全国各地へ、そして世界へ医療の発信地となることを願い、躍進を続けられますようご祈念申し上げます。

外国人生
留學生
支援団体

留学生とともに

平野喜三 / (財)大津市国際親善協会顧問

滋賀医科大学開学30周年おめでとうございます。

私と滋賀医科大学との出会いは、いまから18年前友人からの紹介依頼で中国浙江省医科大学付属病院医師卞卡（ピアンカ）留学生のホームステイを受けたのが縁で、その時以来今日まで医大の留学生の皆さんと親善交流ができ、学位を持って帰られた多くの皆様から、環境の良い滋賀医大での良き先生方のご指導と滋賀県や大津での楽しい思い出をたくさん持って帰られたこととお便りで頂き嬉し



留学生との交流会

く思っています。

ホームステイの留学生ナカ（ピアンカ）君についてチヨットふれてみます。彼が初めて家にきて、挨拶してくれたとき、とても礼儀正しく、「よろしくお願ひします。」その次に、開口一番、「『郷に入れば郷に従え』という諺があります。どうか何でも教えてください。」との言葉を聞き、中国から素晴らしい青年がきてくれて、我がことのようにうれしかった。初めての日本で、日本語も短時間しか習ってきていないようであるにもかかわらず諺を話してくれたのには恐れ入った。彼は薬理教室戸田教授のもとで日夜

懸命に勉強して家でも夜おそくまで頑張っていました。日に日に日本語は驚くほどうまくなり日本の日常的な習慣、生活文化も積極的に身につける努力をし、地域の人々との交流を通じて町内清掃とか奉仕活動にも参加、更に津市内在住の外国人の交流等、「ピアンカさん、ピアンカさん」と誰からも親しまれる留学生でした。今は、アメリカで立派になっておられます。私が、「滋賀医大の留学生には課せられた大きい目的があります。目的優先で勉強してくださいよ。」と云いますと、彼は「わかりました。戸田教授のご指導のもと一生懸命やります。そして日本にお世話になっている間（5年間）だけでも、日本文化を身につけ日中友好親善に少しでも役立てばと思っています。」と話してくれました。

滋賀医大の留学生を支援する「滋賀医科大学国際協力会」が昭和58年に発足し、これが発展し平成2年に「財団法人滋賀医学国際協力会」が設立され、更に校内に留学生のための国際交流会館が平成6年に建設され、名実ともに外国人留学生に温かい援助と安心して医学の研究に励んでいただける環境ができたことを喜ばしく思います。

私も留学生交流の拠点としての会館で留学生諸君と懇談ができ、世界にそれぞれ巣立って行く滋賀医大の留学生が、世界のどこかで大きく芽を吹き、滋賀県から世界へ友好親善の輪が広まっていくことを願っています。

私の平和への願ひは、今から59年前日本の敗戦 - 中国東北（もとの満州国）で敗戦に遭い一夜にして崩壊、敗戦でどんなに人間に恐ろしいことがもたらされたか？無秩序の街で、略奪、暴行、民族間の争いがつきることなく、日本軍は在満邦人を見捨て、ソ連軍に連行捕虜となり、開拓団は開拓地を追われ、逃避中に集団自決や家族が避難途中で力尽きばらばらになり、何万人の幼児や子どもたちが置き去りにされました。いまも日本に帰ることのできない残留孤児らが中国人に温かく育てられています。敗戦前までは、日本の誤った侵略で中国国民に多大の迷惑をかけたにもかかわらず寛容な行為に敬服しています。私はそれら戦後の悲惨さを身をもって体験いたしました。二度と戦争はすべきではない。女性と子どもが一番犠牲になる。いずれにしても戦争で人間すべての人権が無視される体験をしたことから、世界が平和であって欲しい。だが自分のできることで何ができるかを考えたとき、国の境界を越えて、市民と市民が心を開く民際外交で、普段着で気楽に長続きがするよう親善交流をして、平和の願ひが少しでもかなえられればと活動しています。

しゃくなげ会

滋賀医科大学の創設としゃくなげ会の三十年

西田 眞一 / しゃくなげ会副理事長

開学三十年、おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

私は、昭和19年4月、滋賀県庁に奉職以来35年、同55年3月、県職員研修所長を最後に定年退職しました。この間いろんな役職に就きましたが、最も印象に残り感動した仕事は標題に関わったことです。

その頃、当時の田中内閣が「一県一医大」構想を発表され、未設置の凡そ20県が双手をあげて賛同しました。

とくに滋賀県は、全国的に比較して医師の数、大学学生の入学定員が各々最低の貧弱県で(最近の発展・活力は一等県)、昭和47年、県庁に国立医科大学誘致準備室が設けられ、私が専任参事として任命されました。官・民・関係機関団体を一丸とし挙げての運動は極めて積極的で、殆ど東京に常駐して連日、自民党、文部省と広報・陳情・要請活動が展開されました。

また、京都大学、京都府立医科大学との交渉も重要な仕事で、全面的な協力体制を得ることが出来、「ユニークな医学教育の在り方」構想は大きな力付けとなりました。

幸い、運動は功を奏して滋賀県に国立医科大学設置が決定したのは、昭和48年12月31日、大蔵省の明年度国家予算案が決まった時で、その時にはこれまでの苦勞が報われた事で大きな喜びと感動を覚えました。そして翌49年10月に開学しました。

今日の滋賀医科大学の陣容はさすが国立だからこその立派な内容で、30年間、滋賀県の地域医療の向上、文化ゾーン(県立高校・近代美術館・図書館)知的環境の発展に果たした貢献は筆舌に尽くし難い思いで感慨無量です。

さて、「しゃくなげ会」と私のつながりも長くなりました。県内の有識者が中心となり、大学開学と同時に発足しましたが、医科大学の要請に応えて(解剖学実習に必要な)献体の確保を内容とする団体組織であり、意義を了解していた

だいた御本人の篤志を尊重しております。「しゃくなげ会」の名称は県花のしゃくなげに基づいています。その頃、医科大学の最大の課題は、系統解剖の教育実習に必要な御遺体の確保でした。私は創設時の発起人の一人であり、以来役員を続け常務理事を経て現在は副理事長を勤めています。献体登録番号は第一号です。

現在、健在会員は約1,400名で、これまでの献体数は1,050名になります。

全国の解剖献体団体でも、献体に対する丁寧な取扱い、尊厳な姿勢は誇るべきものがあり、「御遺体こそは尊き師なり」とする教室関係職員に深く敬意を表しています。



解剖体納骨慰霊法要(比叡山延暦寺阿弥陀堂)

霊安室での献体の受け入れは、学長以下大学関係者や学生代表も参列して肅々と行われます。毎年五月には比叡山延暦寺阿弥陀堂において慰霊法要が行われ、比叡山横川の慰霊碑前での納骨式、ボランティア会員による定期的な墓地清掃、毎年秋の解剖慰霊式、しゃくなげ会総会、記念講演会、自己啓発の宿泊研修会、機関紙「しゃくなげ」の発行と数々の行事も多彩に開かれています。

私も、長男が神戸の病院内科部長として（京都府立医大卒）勤務し、孫も大阪の病院勤務医として（阪大卒）従事していますので、医療について多少関心がありますが、自分自身の健康にはよる年並みのせいかわ自信をなくしています。ここ数年来、呼吸器の疾患で腫瘍の手術をしました。京都の桂病院では、肺扁平上皮癌での摘出手術、また放射線治療とそれがいずれも滋賀医科大学卒業の医師に主治医として診療して頂きました。偶然の巡り合わせに驚いていますが、言わば、私が誕生にかかわった滋賀医科大学に命を救われたような感慨を覚えます。

滋賀医科大学が、世界に羽ばたく医師の育成、医学の研究、悩み苦しむ患者を癒す診療、それぞれにおいて、今後更に飛躍していくことを切に願う次第です。